

(薩摩郡下甕村手打字向井)

位置と環境

下甕島の南端にある手打湾に沿った新砂丘の背後に、長川とその周辺の水田を隔てて標高7mほどの小規模の古砂丘があるが、この砂丘に位置する。

貝塚の面積は約170m²、砂層上に約1.5mの混土貝層が堆積し、その上を約50cmの腐植土が被覆している。

調査の経緯

昭和2年(1927)3月、手打小学校の二宮校長が山崎五十磨宅に土器等を持ち込み、そのことを山崎が5月25日付けの鹿児島朝日新聞に弥生時代の貝塚として詳細に記したのが手打貝塚紹介の最初である。

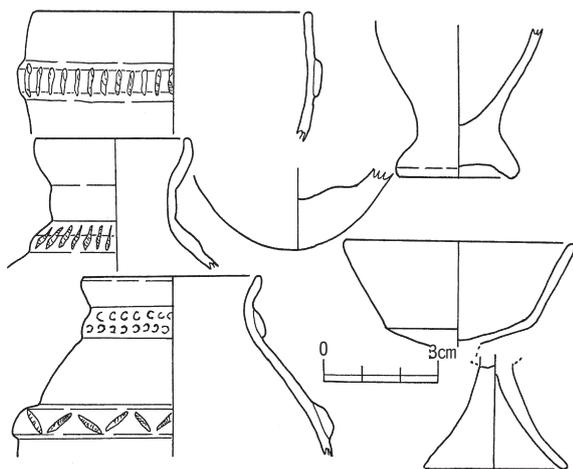
昭和9年1月には寺師見國が2日間発掘調査を実施し、その成果を史前学雑誌に紹介した。さらに昭和36年8月には京都大学甕島学術調査団(団長藤岡謙二郎)によっても調査されている。

遺構と遺物

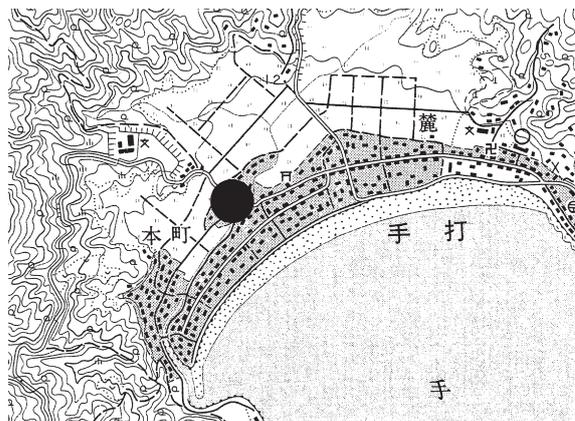
20cm内外の石を配した配石墓があり、石枕様なものを置いた伸展葬の熟年男性人骨が発見されている。周辺から成川式土器の甕形土器と須恵器壺が出土している。

混土貝層からはやや地域色の濃い笹貫式の甕形土器・壺形土器・埴形土器・鉢形土器・高坏形土器と、少量の須恵器が共伴出土する。

甕形土器は口縁直径25~30cmで、口縁部がくの字



第2図 手打貝塚出土の土器



第1図 手打貝塚の位置

状に外反するものと、内反するものがあり、底には浅い脚台がつく。

壺形土器は口縁がくの字状に外反するものと、二重口縁風になるものがあり、頸及び肩部に凸帯を巡らしたものが多い。凸帯にはハの字形、くの字形、ノの字形、竹管文、鋸歯文などが付されている。底には浅い脚台がつく。

埴形土器はソロバン玉状の胴部で、口縁が外反し、平底である。丹塗りとなる。鉢形土器は口縁が広がるもので、脚台がつく。高坏形土器は、椀状の坏と裾が広がる脚台からなり、丹塗りとなる。

獣骨にシカ・イノシシ・ウサギ・イヌ等が、魚骨にブリ・サワラ・ブダイ・カスサメ等がある。貝はハマグリ・ヒラコマが多量に出土し、ほかにスダレガイ・ブニエガイなど20余種が出土している。

土器の形態は成川式土器によく似ているが、壺の口縁部・胴上半部の文様などに中九州・熊毛諸島の影響がみられる。これらは古墳時代前半のものと、後半のものがある。

特徴

- ・南九州では類例の少ない古墳時代の貝塚である。
- ・甕島諸島の古墳時代の独自性を示している。

資料の所在

寺師の発掘資料は、鹿児島県歴史資料センター黎明館に寄託収蔵されている。

参考文献

寺師見國1934「薩摩国甕島手打貝塚」『史前学雑誌』第6巻第6号

(池畑耕一)